

THE STRANGE FATE

諸行無常マン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モーさんに転生か憑依した主人公。型月世界とは露知らず、円卓崩壊を防ごうと奮闘するよ。目指せ、父(母)上からの認知。目指せ、カムラン回避。原作知識というよりは、大まかなあらすじしか知らないけど、まあなんとかなるよ！

それでも崩壊したら、もう是非もないよネ。

目次

生まれてからちよつと経って	1
第2話	3
母と兄と私と屑と	6

生まれてからちよつと経って

私の母は、見惚れるほど美しく、清々しいほどに醜悪な存在だった。いつなんどきでも、「あなたはいつかブリテンを統べる王になる」などという戯言を抜かし続けていた。赤ん坊のころから、私はそれを枕詞に、子守歌の代わりに聞き育ってきた。そして言語を理解し、人と物と動物を区別し、識別できるようになったところに、私はようやく理解した。この母は、この女性は、狂っているのだと。この母親はどうしようもなく壊れていて、どうしよもなく淀んでいるのだ。人間の悪性の集合体のような存在だと、幼いながらに恐怖した。そして、我が母の歪さに気付くのと同時に、この世界が何なのかを理解した。

アーサー王物語。

この物語には四つのストーリーがある。第一幕は『アーサー王の誕生、そして選定の剣を引き抜き、ローマ皇帝を倒しヨーロッパの王となるお話』。第二幕は、『アーサー・ペンドラゴンと13人の円卓の騎士の冒険』。第三幕は『突如現れた聖杯を探求するお話』。そして、円卓崩壊が始まる第四幕は、『ランスロット卿とギネヴィア王妃の不倫が原因で始まった「カムランの戦い」としてアーサー王の死』、これがアーサー王のお話の全てだ。

このイギリスで作られた、全世界でもその名を知らない人間はいないほど有名なファンタジー小説。その知名度と流用しやすい設定などが相まって、日本ではアーサー王がくあい少女になったり、海外では変形ロボの祖だったり、派生しすぎて収拾がつかないことになってしまっていたりする。

要するに何が言いたいかというと、私はどうやら、アーサー王物語の世界に転生、または登場キャラに憑依をしてしまったようなのだ。しかも、私の母の名を聞く限り、もつとも転生してはいけないキャラに転生・憑依してしまつたらしい。

そんな我が麗しき母の名は、サブカル糞女として名が高い『モルガン』という。

終わった。人生詰んだ。まさか母親が嫉妬で国を滅ぼそうとし

ちやうやばい人だなんて。

そしてその子供といえば、ブリテンを二分させ、最終的にアーサー王と刺し違えて死亡してしまうあの『叛逆の騎士モードレッド』ではないか。

まさか、叛逆者としてこの世に生を受けるとは思いもしなかった。しかもこのままいけば、よくわからないままアーサー王とそりが悪くなって、円卓の騎士と仲が悪くなってしまおう。しかもお兄ちゃんであるアグラヴェインが、ランスロットの浮気をチクろうとしたところを、逆上したランスロットに殺されてしまおう。

よくない。非常によくない。この運命を変えないと、もれなくおなかに風穴があいて丘の上で死んでしまおう。そんな無残な死に方はお断りだし、実の父を裏切るのもたばかるのもお断りだ。

ならば、やることは決まった。

母であるサブカル糞女狐を殺し、ランスロットの不倫を止め、父上に私の事を認知してもらおう。

そして、私が死ぬという結末を変える。ブリテンも崩壊させないし、アグラヴェインも殺させない。このバッドとトゥルーエンドしかない世界を、この私が、叛逆者たる私を変えてやる。バタフライエフエクトなんのその、私は叛逆系で反抗系なキャラなんだ、アーサー王伝説なんざ、根本からひっくり返してやるさ。それが叛逆つてもんだろ？

「それじゃあ、一丁派手にいきますか！」

あ、でも私、アーサー王伝説は読んだことないから、原作知識とかもってないや。どうしよう。

第2話

はつきり言おう。正直に打ち明けよう。なめていた。心の底から軽視していた。いくらキチガイな母親とはいえ、子を愛さない親はいないだろうと高をくくっていた私が馬鹿だった。

今、私は母の「修行」と称した虐待を受けている。

事の始まりはこうだ。

私はモルガン家内の自室で、一人考え事にふけていた。

考え事の内容は、どうすればブリテン崩壊を防げるのかということについてだ。私は残念なことにチート能力を持っているわけでもなければ、人の心を鷲掴みにする卓越した料理スキルも当然ながらもっていないただの人間だ。なので悠々自適な歴史改変生活などおくれなしいし、家事や人間力で誰かを丸め込んだりもできない。最初こそ『二次小説の主人公たちは特にこれといった苦労もなく、なんやかんやでチート能力や謎のオカン力を駆使して異世界の定説を変えていくものだから、もしかして私でも軽く歴史を変えることができるほどのチート能力をもっているんじゃないか?』とかなんとか思っていたが、そんなことはなかった。

私に俗に言う「特典」がないとわかった時点で、私は能力に頼らず生きるしかないのかと少しがっかりしていた。だって、せっかく異世界転生?の様な何かを体験しているというのに、テンプレも何も無いなんてつまらないじゃないか。

しかし、ないものにぶつぶつ言っても仕方がない。おとなしく割り切り、今やるべきことを考えていた。

だが、再度思考の海に飛び込もうとした瞬間、母がいきなり部屋に訪れ、「二度ブリテンに住んで来い。これも修行だ」と言い、私をブリテンのどこかにある小さな小屋に飛ばしやがったのだ。

もう、普通にドン引きした。いくらキチガイだからと言って、そんなことするか?あなた仮にも母親でしょ?もつと子供のためになることをしなさいよ。他にもいろいろ言いたいことはあったが、ついで言えずに、私は小汚く薄暗い小屋の中で一人寂しく座っている。

——もうマヂ無理、自殺しよ。

素で言いそうになるほど、私の心は絶望で満たされている。どうすんだよ、これから。金もない、食料もない、衣服もなければ靴もない。あるのは雨風がやつとこさしのげる程度のあばら家と、腐食し壊れかけた小さな机と椅子のみ。あとは小屋の中で散らばっているカビむした藁くらのものだ。

いや、どう生活しろと。まさかとは思うが、かび臭い藁に埋もれて夜を過ごし、昼はわずかな水で飢えをしのげとでも言うつもりか、あの母親は。無理に決まっているだろう、そんなの。こちとら齡5歳のぴちぴち幼女だ、いくら胃袋が小さいからと言い、飲まず食わずで生活できるほど、聖人じみた身体構造はしてしない。

もう無理。絶対に殺す。たとえあの女が母の愛を見せたとしても、私は笑いながら首ちよんぱしてやる。

が、女狐を屠る算段を考えるより、私はやらなくてはいけないことが山ほどあった。

実は、このあばら家に飛ばされてから少し経ったとき、外に出て少しばかり様子を伺ったのだが、ここはどうやらキャメロットの外にある中規模の村らしい。とりあえず人がいるところだよかったが、状況は最悪だ。おとぎ話の世界とはいえ、ここは不可思議と不条理が跋扈するアーサー王物語の中。いくら村内とは言え、安心安全なキャメロット城内ではない。散歩してたら魔物に襲われるなんてことが現実起こりうるし、何より死の可能性がそこかしこに落っこちている。しかもこの村を見た感じ、この村には人外が通った跡がある。そればかりか家も何軒か半壊していたりした。この状況から察するに、この村にはときたま家をぶっ壊せる程度の化け物がやってきて、人を食うか殺すかしているのだろう。

やつべえよ、これは死んじまう。

もはやなりふり構ってられない。私はあぐらをかいて、今私がしなくてはいけないことを考える。いったいゼンたい、異世界に飛ばされる系主人公はどやってあんな危険が全然ないルートを選べるんだ。天性の直感か何かを有しているのか。

異世界転生系の主人公のことを思いながら名字も、とりあえず考えついたのは、村を見て回り、村の方々に話を聞いて回ることであった。我ながら転生主人公としては地味な作業だと思う。

だが、地味だからと言って侮ってはいけない。これをする理由はちやんとある。

その理由は、うかつに動けないからだ。

先ほど人外の通った後があると云ったが、もしかしたらそうじゃないかもしれない。単純にここらで一度戦争があつて、ここも戦場となつたからこうして家が壊れていたりするのもかもしれない。あきらかに人間や動物のものではない足跡があつたりするのも、もう結構昔の話かもしれない。

それなら戦争孤児を偽って誰かの家にお節介になればいいのだが——最悪なパターンは、あの糞親の策略で「人間に化けた化け物の村」に送られたのかもしれないということだ。あのモルガンが「修行」と言ってきたのだから、生ぬるい修行ではないのは容易に想像できる。

だからこそ、事前の情報収集がひつようだ。憶測だけでこの場を危険と判断し、行動してはいけない。後で必ず痛い目を見る。今は村民たちの様子をうかがって、すこしでも危険が存在し、きな臭いと感じたらこの村からおさらばしよう。逃げるのがかないそうにもないなら、この村を拠点に強くなるしかない。本音を言えば今からでも逃げたいのだが、この村の内情もわかっていない状態でうかつな行動をするわけにも行かない。気は進まないが、やるしかないのだ。

仕方なく、私は護身用に落ちていた木の枝を広い、渋々といった感じで私は村を徘徊するのだった。

あーあ、面倒だ。アグラヴェインお兄ちゃんが「妹よおおお!!」とか叫びながら迎えに来てくれないかなあ。

母と兄と私と屑と

「■■■■■■■■■■」

「××」

「■■■■■■■■■■」

いつもの光景だ。戦場にて鬼神のごとく敵を切り裂く重厚な鎧に身を包んだ騎士たちが、この部屋に入りあの御方の前に座ると、まるで借りてきた猫か犬のように大人しくなる。そこからは実用性もなければ効率も糞もない、何の意味もない話し合いを行うだけという、時間を無駄に浪費。あの胡散臭い魔術師に至っては、この場にきてすらいらない。トリスタンは寝ているのか起きているのかも——いや、ベティヴィエールが殴ったということは寝ていたようだ。

——……時間の無駄だな。

これ以上この場に拘束されるのはごめんこうむる。私には、この糞のような会議よりも重要なことがあるのだ。しかし、何も言わずに終わるのを待つてばかりでは、私も同じように時間を無駄にしているだけだ。仕方なく今の状況でできることを二、三個意見として出した後、早急に会議を終わらせるよう言い、私は足早に円卓の広間を離れた。

また敵が増える。だんだんと崩れて消えていく私の立場を考えると頭が痛くなる。だが、それも仕方がないことだと割り切り、急ぎ部屋に向かう。

焦燥感のせいか無駄な時間を過ごしたイラつきからか、自然と足取りが早くなる。通り返る兵士や給仕の者の怯えた顔から察するに、今の私はいつも以上に顔をしかめているらしい。いつもは私を見て怯えるその顔を見るだけでイライラするが、

「あの女は何を考えているのだ——ッ」

——モルガン——王の敵。円卓の敵。キャメロットの敵。そして、他ならぬ私の母であり、私の敵。その目的は円卓を崩壊させ、ブリテンを我が物にせんというものだ。そしてより円滑に、小野が手を汚さずに目的を達成するために、私を円卓へと送り込んだ。

そんなイカれた女が昨晚、突然私の枕元に現れ「妹ができました。明日、詳細を話します」などととんでもないことを言い残し去っていったのだ。早くその真意を聞きたかったのだが、そういう日に限って緊急会議とは、本当に運がない。幸運値というものが仮にあったとしたら、私は間違いなくZだろう。

このどこにも発散できない、やり場のない怒りを頭の中のモルガンにぶつけながら自室へ戻ると、そこにはすでに、こちらの心情を見透かしたかのような蠱惑的な笑みを浮かべた女がゆったりと椅子に腰を掛けていた。

腰に下げる剣にゆるりと手をかける。この女のことだ、どうせ部屋中にアニカを仕込んでいるに違いない。なので、こうして警戒してしまうのも仕方はない。決して、決して他意はない。

「これは、昨日ぶりですな。母よ」

「そうですね、アグラヴェイン卿。昨日とまったく同じ仏頂面です。と。しわと白髪が増えますよ」

このまま切り殺してやろうか。

剣の柄を握る手に、自然と力がこもる。この女は口を開けばこれだ、もうすこし、年相応の振る舞いはできないものだろうか。

「そう怒らないで、アグラヴェイン」

本当に切つて捨てようかと剣に手をかけたところで、脳が痺れるような声が響く。魔術でも使ったのか、私の中にあつたあふれんばかりの殺意はきれいさっぱり消えていた。

やはり、この女は苦手だ。そもそもお前が私で遊ぼうとしなければ、こんなことにはならないというのに。

「……なんのことでしょうか、我が母よ。それより、本題に移っていたきたいのですが」

「ああ、そうでしたね。昨日も言ったことですが、あなたに妹ができました。未来のブリテン王の誕生です」

冷静でいたというのに、そのくだらぬ言葉でまた沸々と怒りが込みあがってきた。わかっていてやっているのなら、本当にたちが悪い。「それで？報告だけなら、わざわざこうやってくることも、そのような

豪華絢爛な衣服でめかしこむ必要もないでしょう」

「……………」

何だ。なぜそこで黙り込む。いつもなら痛烈な皮肉が雨あられのように降り注いでくるのだが、何か心境の変化でもあったのか。…いや、この女に限ってそれはないな。それこそ死の瀬戸際に十数回立つてようやく改めるくらいだろう。

いったいどうしたことかと考えを巡らせていると、モルガンは少し気まずそうに、それでいて恥じているかのようにこう切り出してきた。

「実は、転送魔術で子と共にここに飛ばうとしたのだけど……失敗して、あの子をどこかに落とすしちゃったみたい」

額から、血管が切れる音がした。



どうも。今しがた、突如として原因不明の、これ以上はないといえるほどの母への怒りが沸いていたかわいそうな身寄りのない子供、モードレッドです。

その後テクテク、テクテク、村を木の棒片手に駆けずり回り、あたかも「この村の子が元気よく遊んでいる」ように演じていた私ですが、私を見てありえないものを見たかのように驚くおじさんやお兄さんを見かけたのです。まるで、久しぶりに子供を見たかのような、そんな反応でしたね。

確かにこの村を歩いていて、一度たりとも子供の姿を見ていない。でもそれって怪しいよね。そんな場所があるのか、あつたとしてもあんな顔するだろうか。こちとら無邪気に遊んでただけなんだから、そんな妖精を見たかのような反応はおかしすぎる。

なので、いつでも抵抗できるように石やら小さな虫やら木の枝やらを集めながら、とりあえずその場から離れようとしたのだが。

「おいおいおい、まだいるじゃねえかよ、ガキ」

「あの爺婆共、俺らに逆らってまだ子供を隠していやがったか」

「まっさか。あの婆共が、これ以上俺らに抵抗しようと思うか？ あんだけこの村を蹂躪してやったつてのによ」

あつというまに囲まれ、とんでもなく物騒な会話を聞かされていた。

聞いている限りだとこの村を蹂躪したのはこの男たちで、村に子供が見当たらないのはこいつらが攫ったかなにかしたからのようだ。だとすると、今の私の状況はなかなかハードだ。これが生前？に見ていた転生もの小説の主人公なら、チート能力や主人公補正でこの窮地を脱することができるようだが、私の場合そうはいかない。能力なんて異能もなければ、アーサー王物語の主人公、アーサーではないのだから、主人公補正もない。

ならばどうする。おとなしく捕まり、売り飛ばされるなり侵されるなり殺されたりするか？それとも、抵抗し苦しんで死ぬか？否。どちらにも否だ。楽に不幸な目にもあいたくないし、苦しみながら不幸な目にもあいたくない。

「なあ、このガキ、なんか気色悪くねえか？さつきからピクリとも動かねえし、瞬きもしてねえぜ」

「ああ……それに、ずっとぶつぶつ言ってるんだよな」
「どうするよ」

ならば、ここはあの言葉に従うとしよう。三十六計――

「あ――？」

――逃げるに如かず。

イメージする。短い時間の中、脳内で自分がどう動くべきかを何度も何度もシミュレートし、構築したイメージ図を体にインプットする。

――踵を軸に――

――体重を背中に回すイメージで――

――背後に体全体が向いたら――

――つま先を地面にめり込ませるイメージで――

――倒れるように走る――

効果音は「ギャルツ」、もしくは「ドリユツ」。走り出す瞬間の効果音は「ダツ」ではなく「ドンツ」と地面が爆ぜるような音で。見えるのは後方へ流れていく景色、聞こえてくるのはぐんぐんとか細くなっ

ていく私に向けての怒鳴り声。

走れ。とにかく走れ。走って走って、走りまくれ。

「まッ、て、コラッ、餓鬼イツ!!」

が、すぐに距離を詰められる。自分のすぐ後ろから地面を荒らしく蹴る音が聞こえてくる。

あたりまえだ。いかに早く走っているイメージを抱えながらできるだけ理想に近い形で走っているとはいえ、子供と大人とでは筋肉の量も体力も差がありすぎる。どれだけドーピングをしても、主人公だったとしても、逃げきれはしないのは自明の理だ。

だが、だからこそ、やれることはたくさんある。子供の体をフル活用したすばしっこさと、先ほど拾っておいた様々なものを使わせていただこう。あの曲がり角を曲がってからが、これからの人生を大きく左右する人生の別れ道だ。

あと十メートル。七、五、三、一、——……

——さあ、ショータイムだ。



「つたく、まだいたのかよ……」

男は一人の少女を見ながら、心の中でいらだった言葉を漏らした。

男の名前はミシエル・マージ。元々は名のある騎士家系の長男だったが、日々弱っていくブリテン衰退の波に飲まれ、今ではこうして人さらいなどという職に手を染めている。昔は王に仕える騎士になりたという夢を抱いていた気もするが、今となってはどうでもいい話だと、彼は全てをあきらめていた。

本来ならこの村での『仕事』はもう終わり、共に行動していた男たちと帰って『商品』を売って、酒を浴びるように飲んで夢の世界へと旅立っているはずだった。だが、とんでもないイレギュラーが目の前に現れた。さらりとした金糸のような髪をなびかせた、整った顔立ちの目つきの悪い少女が、まるで誘拐のことなど初めから知らなかったといわんばかりの笑顔で楽しそうに遊びまわっているではないか。

事前の入念な準備で、この村にいる子供の数も、子を産んだ女の数も子を孕んでいる女の数もしっかりと把握していた。だというのに、どこをどう見落としたのか、『商売道具』である子供が一人残っている。

大人の口はいくらでも黙らせることができる。しかし、子供の無邪気な口はそう簡単にはいかない。たとえ剣を首筋に当て「口外するな」と脅したところで、ここらを巡回している騎士に何か聞かれればポロリと我々が来たということを喋ってしまうかもしれない。傷をつけても殺しても、なにかを喋ってしまうだろうし、死体が見つければ口封じとして殺されたことなどすぐにばれてしまうだろう。

男は木の棒を振り回している少女を捕縛するべく、すぐに二人の間を呼び集め、少女を取り囲んだ。

(どうせビビッと動けなくなる。そしたらいつも通りふん縛って荷馬車に詰めて終わりだ)

だが、目の前にいる少女は囲まれたとたんの様子がおかしくなった。うつろな目で自分たちの顔を眺め、ぶつぶつとか細かい声でナニかをつぶやき始めたのだ。恐怖で壊れたのかとも思ったが、違う。この少女は普通ではない。つぶやいている言葉も聞いたことのない言語にときおり英語が混じっている不思議なものだ。こちらを見ている二つのくりくりとした目も、まるで見てはいけない穴を除いてしまったような——深い深い、真つ黒な色で染まっている。少女を観察し、考えれば考えるほど周りの気温が下がったかのような寒気に襲われた。

この少女は危険だ。

かかわってはいけない、そういう類の存在だ。

だが、だからこそ、高く売れる。

男は、それでも捕まえる道を選んだ。自分から異質に飛び込む道を選んだ。その結果、自分がどうなるかも知らずに、目先の欲に走ってしまった。

そして、男が捕まえることを心に決めた。

だが、お前は心を読んでいたのか、そう思わせるほどのタイミング

で、少女の姿が消えた。

ちようど、「どうだつていい、捕まえよう」「捕まえるために腕を動かそう」そう頭に言い聞かせて、肩から指先まで、すべての筋肉が総動員して腕を上げようとした瞬間に、人間のものとは思えない急なターンで自分と横にいた男の間を縫うようにして、四足歩行の肉食獣を思わせる走り少女は走り出したのだ。

一瞬、本当に消えたかと思った。男はコンマ数秒だけ惚け、すぐさま「少女が逃げた」と認識し、少女が入っていった方向を見る前に体を動かした。

「まッ、て、コラッ、餓鬼イツ!!」

逃がさない。心の中にあるのは出し抜かれたことに対する怒りでも、いまだに動けないでいる後方の馬鹿どもへの呆れでも、未知の存在に対する恐怖でもない。

知りたい。ただ単純に、あの一見ひ弱そうな少女の中にある黒くて巨大なナニカを知りたい。追いつくこと自体はできる、いくら早くても、それは「子供にしては」という限定的な速さだ。今はともかく、目の前の小さな子鬼に追いつく。

(あともう少しで——)

手が届く——。

伸ばして、伸ばして、指先が彼女のボロ服にかすった瞬間、また、目の前から消えた。

「ぐッ、おお、おお、おっ、おおおツツ?!?!?」

気付かぬうちに、自分の体勢はだいぶ前に傾いていたのだろう。獲物が消えたことと、自分でも驚くほど速く走っていたことで止まることができず、地面と数回キスをした後、坂を転がる石のように転がり続け、大きな音と骨まで響く衝撃と共に小さな納屋に突っ込み、そこでようやく体が止まった。

「い——ッ」

声があまく出ない。口いっぱい血の味がする。

しばらく動けずにいると、どたどたと騒がしく仲間の二人が走ってきた。

「おいおい、大丈夫かよ!？」

「急にあの餓鬼と一緒に消えるもんだから、一瞬どこに行つたのかつて焦つちまつたぜ」

二人の男は暢気にも聞いてもいない言い訳をはなし始める。

いつもならわかつたわかつたと聞いてやる余裕もあるのだが、今回に限って男に余裕はなつた。苦痛に歪んでいた顔は見る見るうちに怒りに染まつていき、竜の咆哮とばかりに怒号を飛ばす。

「言い訳なら後でたつぷり聞いてやる! いいからさっさとあの餓鬼を追いかけるツ!! いいなツ!!」

「わ、わかつた!」

捕まえなければ、なぜここまであの餓鬼に執着しているかなんて自分にもわからない。だが、今あの餓鬼を見失えば、自分は——いや、俺は変わらない。きつといまの稼業を続けてどこかでへまをして捕まつて、首を落とされるだけの人生が待っている。

そうじゃない、そうじゃないんだ。理屈もボロ靴もない、理論すら通っていない。だが、あの少女がいれば、一度でもはなせれば、何かが変わる。俺の中のナニカがそう言っている!!
「ぜってえに逃がさねぞ…!!」

よろけながらも立ち上がり、おぼつかない足取りで外に出る。その眼は、今までの死んだ魚のような眼ではなく、希望をつかまんとする戦士の目が変わっていた。

変わる。俺も、この肥溜めみたいな生活から抜け切れる。ここを出て、あの少女と話せれば——

『そうか。貴様が下手人だな』

「へ?」

彼の決心と何かが変わるといふ確信は、無情にも、重々しい黒き甲冑をまとつた騎士の持つ剣の一振り、いともたやすく粉々に砕け散つた。